

# グローバル化のなかのラテンアメリカ文化

野谷 文昭

## 「ことの始まり」

立教大学にはラテンアメリカ研究所（通称ラテ研）がある。創設は1964年、今年すなわち2004年には40周年を迎える。したがって、今や本学の研究所のなかでも老舗の部類に属すると言えるだろう。ただし、2年前から状況が変わり、組織としては、新たに創設された総合研究センターの傘下に置かれることになった。にもかかわらず、その独立性は概ね保たれ、1964年の研究所設立にやや遅れて開設された学内外向けの公開講座の運営を変らず続けている。筆者は1987年に旧一般教育部に就職して以来、所員あるいは所長として研究所と関わってきたが、そこで絶えず感じていたジレンマがある。それは、ラテ研のユニークな特長として高く評価されている講義科目がありながら、それがゼミ形式を謳い文句にしているため、受講者数を制限しなければならないことである。より多くの受講生が同時に参加できる授業がほしい。だが、科目数が限られているなかで、いかにしてそれを作り出すか。これは

まさしくアポリアである。

## 「一石二鳥あるいは苦肉の策」

そこで考え出したのが、筆者が担当していた一般教育科目の「文学」という科目でラテンアメリカ文学を取り上げ、それをラテ研との相乗り授業とすることだった。この方式は、一般教育から全学共通カリキュラムに移行したのちも踏襲し、今日に至っているが、問題はラテ研が通年制を採用しているのに対し、全カリが半期制を導入したことで、半期は相乗りが出来ても残り半期が空白になってしまう。そこでやむなく通常よりも多く科目を担当することによってそれを補ってきた。だが、分属先の法学部の授業への関わりや、大学院比較文明学専攻への関わりなど、筆者の立場が複雑化し、所長として運営に当たる一方で講座の講師も務めるということが難しくなった。しかも、総研センター設立に伴って、ラテ研にも独立採算方式が適用されることになり、講座運営に新機軸が必要となった。そこで考え出したのが総合Bの利用である。幸い総合Bには研究所提

供科目という枠がある。これを使わない手はない。こうして総合 A と総合 B を連結させ、それを通年科目としてラテ研受講生に相乗りしてもらうというアイデアが生まれ、それを具体化したのが、今年度誕生した『グローバル化のなかのラテンアメリカ文化』だった。

### 「情報不足とステレオタイプ」

断っておくが、この科目はラテ研の都合のみで生まれたわけではない。ここでも一般教育部時代から感じていた疑問がまずあるのだ。本学には第 2 外国語としてスペイン語が早くから採用されているが、学生がそれを選択し、スペイン語圏に興味を抱くようになって、その興味を発展させることのできる科目が見当たらない。かつて文学部にフランス革命や秩父事件の研究者として知られる井上幸治氏がおられたころは、少なくとも南欧としてスペインはカバーされていたはずだが、それはともかく現状は、やはり第 2 外国語としてスペイン語を置いている他大学に比べ、著しく遅れている。「文学」でラテンアメリカ文学を取り上げたのも、当時、〈ブーム〉と呼ばれるほどこの地域の文学が注目される状況がありながら、それがまったく反映されないカリキュラムに疑問を抱いたからだ。情報のないところに関心は生まれない。

率直に言って、本学にはラテンア

メリカに関する情報が圧倒的に不足している。ラテ研にでも関わらない限り、学生（教員も？）はもっぱらマスメディアから情報を得ることになるが、これがまた少ない上に、きわめてステレオタイプ化しているのである。メキシコと言えば、サボテンにソムブレロ、髭のマッチョがテキーラを煽って情熱的な娘の前でギターを掻き鳴らしている。こんなイメージがテレビのコマーシャルやハリウッド製映画を通じて植えつけられる。だが現実には、日本とメキシコは今自由貿易協定を巡って熱い戦いを繰り広げている最中なのだ。日本同様メキシコも、グローバル化する世界のなかにいるのである。いかにしてラテンアメリカのステレオタイプ化したイメージを修正するか。いかにして生き生きとした現実を伝えるか。だがそれが、麻薬・ゲリラ・経済破綻といった負の要素を強調するばかりであれば、特派員の送った原稿がデスクによって取捨選択された後の新聞の紙面となんら変わらないことになる（日本のマスコミは日本と関係のあることには飛びつくが、それ以外のことには無関心なのだ。たとえば、毎日新聞外信部長の中井良則氏によれば、ペルーの日本大使公邸占拠事件の際、1ヶ月の報道で費やされた記事の量は、氏が5年間のラテンアメリカ特派員時代に執筆した記事の総行数に匹敵するという）。そのような要素がなぜ生じるのか。それがすべてなのか。ポジティブ

な側面はないのか。こうした疑問に答えようとするのがラテ研提供科目としての『グローバル化のなかのラテンアメリカ文化』だった。

### 「多彩な講師陣」

講師については、ラテ研所員の他に講座講師、公開講演会講師などラテ研と関係の深い人々を中心に、多様なジャンルをカバーできるような人選を行った。その結果できあがったのが次のラインナップである。

#### 〈授業テーマ・概要〉

- 1 オリエンテーション  
(野谷文昭・法学部教授／ラテンアメリカ研究所長)
- 2 ジャーナリズムの現場から  
(中井良則・毎日新聞外信部長)
- 3 歴史学の視点から  
(高橋均・東京大学大学院総合文化研究科教授)
- 4 思想研究の視点から  
(小倉英敬・本学兼任講師／元外交官)
- 5 美術の世界を見る  
(加藤薫・神奈川大学教授)
- 6 映画制作の現場から  
(太田昌国・現代企画室編集長)
- 7 宗教は今  
(乗浩子・帝京大学教授)
- 8 グローバル化と音楽  
(濱田滋郎・本学兼任講師)
- 9 ブラジルで何が起きているか

(小池洋一・拓殖大学教授)

- 10 グローバル化とポストコロニアル思想

(林みどり・明治大学講師)

- 11 グローバル化と農業

(木下雅夫・本学兼任講師)

- 12 まとめにかえて

(一ノ瀬和夫・経済学部教授／ラテンアメリカ研究所員)

コーディネーターは筆者が務め、副コーディネーターはラテ研所員の一ノ瀬氏が引き受けてくれることになった。またTAとして比較文学専攻の院生、石村研二氏にAV機器の操作をはじめ、あれこれ文字通りアシストしてもらうことになった。一ノ瀬氏が講師陣と面識がないことや授業が始まっても講師同士は会う機会がないことを考慮し、事前に打ち合わせ会を開いたが、それは講義に関する共通認識を持ってもらうだけでなく、親睦や情報交換の場ともなり、大変有意義であった。だが、そこで分かったのが、米国のイラク攻撃が始まった場合、トップバッターを務める毎日新聞の中井氏の出講が難しくなるかもしれないということだった。結局、攻撃開始が遅れたために、講義自体は成立することになるのだが、我々は二重の意味で開戦のないことを願う一方で、日々の現実に直結しているというジャーナリズムの性格にあらためて思い至ったのだった。もっとも、そのような生々しい現実感覚を

伝えてもらうことが我々の狙いの一つであったことは言うまでも無い。

### 「グローバルゼーションとは何か」

各講師の都合に合わせてのラインアップということで、全体的な流れを作るとは難しかったが、取り敢えずそれぞれがグローバルゼーションをどのように捉えているのか、その概念規定となるような話から始めてもらうことにした。興味深いのは、そこではほとんどの講師が、大航海時代に遡る広義のグローバル化と、1980年代に加速化する開放経済モデルによる世界の画一化の双方を挙げていることである。もちろん現代を語るためには大枠の「グローバル化」を前提としつつ、後者のもたらした現象の分析に力点が置かれるわけだが、混淆文化としてのラテンアメリカ文化を考える場合、コロンブスに始まるヨーロッパ人のアメリカ大陸進出の歴史を不問にすることはできないだろう。

毎回の講義の内容については、メディアセンターのサービスを利用し、アルバイトをお願いした比較文明学専攻の院生、崔善齊（チェ・ソンジェ）氏が記録を取り、レジュメとしてイントラネットで学内配信した。時間差があったので、受講者がすぐに利用できたわけではないが、それを読むと分かるように、我々教員にとっても刺激的で密度の濃いものだった。

### 「受講者とその反応」

講義はまず講師が1時間ほど話題を提供する。次に、受講者が出席票の裏に質問を書き、コーディネーター2人が適当なものを選ぶ。その質問に講師が答えるという形式で進めた。

ただ、講義に熱が入るあまり予定をオーバーして話してしまい、その結果、質疑応答が短くなるケースもあった。受講者の反応について言えば、ラテンアメリカという地域に関する知識が皆無であった学生と、当初から地域に関心を抱き、現地体験もあるラテ研受講生では大きな違いがある。すなわち後者の場合はかなり専門的な事柄も質問の対象とする傾向がある。実際、濱田滋郎氏のCDを使つての講義や加藤薫氏のスライドを利用した講義などとは異なり、ラテ研受講生を意識したと思われるいくつかの講義は入門編をはるかに超えていたため、学部の1年生には難しかったかもしれない。とはいえ、レベルの高い質問を聞いて、学生が大きな刺激を受けたことも想像できないわけではない。というのも、受講者、レポート提出者とも1年生がもっとも多く、成績も悪くなかったからだ。だとすれば、相乗りはポジティブな効果をもたらしたことになる。それに、社会的矛盾を鋭く突いたり、それを克服する方法や展望についての関心ということでは学生も負けてはいない。また無知であるという事実を反省

しながら、報道や学問的関心の欧米偏重に疑問を抱く学生もいた。それは結局、日本という国の世界におけるありかたに関わってくるわけで、それを認識しただけでも収穫と言えるだろう。

ラテ研受講生を除く受講者は登録段階で128名、そのうちレポート提出者が92名だった。ただし未提出者36名のうち21名は4年生である。ちなみにラテ研受講生は25名だった。この25名が空気を作り、学部学生諸君がそれに馴染んでいくのがリアルタイムで感じられたことは、コーディネーターにとって大きな喜びであった。

### 「今後に向けて」

前述のように、この科目は苦肉の策でもあったが、受講者数や講義に対する反応ぶりから判断すると、一石二鳥が成功したのではないかと思われる。問題はこの種の講義を単発で終らせるのではなく、今後も提供できるかということだ。ラテンアメリカへの関心を抱かせるには、情報を提供し続けなければならない。とはいえ、正直に言えば、コーディネーターにとってはかなりの負担となる。講座と学部のドッキングというのは他大学にはほとんど例がなく、その意味では極めてユニークな科目と言えるだろう。またコンソシアムを利用して他大学の学生が受講者に混じっていることは、この科目が学外にもアピールするものであることを示している。ここにひとつの希望があ

る。

わずか1度の試みで判断するのは早計の謗りを免れないが、ともかく我々は今回の試みを肯定的に総括して、次年度も総合Bを担当することにした。

のや ふみあき  
(総合B群科目担当, 本学法学部教授)